

同盟協会

A Translation of Virginia Woolf's "A Society" (1921)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

2010年10月1日受理

ことの経緯はこうだ。ある日、わたしたち、六、七人がお茶のあとで椅子に腰を下ろしていた。幾人かは通りの反対側の帽子屋の窓を見つめていた。店の中は緋色の羽根飾りや金色のスリッパがまだ明るく光に輝いていた。他のものは、ただ漫然と、トレイの隅に砂糖の山をいくつも作り上げて、時間をつぶしていた。思い出す限りでは、それからしばらくして、わたしたちは暖炉の前に集まりいつもどおり男を褒め称え始めた。どんなに力強いか、どんなに気高いか、どんなに勇気があって、美しいかと。そうしてなんとか一生の伴侶を見つけ出した女のことをたいそう羨ましがったものだ。そうしてそのときに、それまでずっと黙っていたポールがわっと泣き崩れたのだ。ポールというのはね、いつだって変わり者だった。ひとつには、父親に一風変わったところがあった。遺言で一財産、ポールに遺してあったが、ロンドン図書館の本を全部読むという条件付きだった。泣き出したとき、わたしたちはできる限り彼女を慰めた。でもこころの底ではそれがいかに無駄なことかも分かっていた。わたしたちはポールのことを好きなことは好きだったのだが、全然美しくはなかったからだ。靴のひももほどけたままにしておくとか。わたしたちが男を褒めていたときも、自分と結婚しようと思うものは誰ひとりいないということを考えていたに違いない。ようやくポールは涙を拭いた。しばらくは、ポールが言うことをわたしたちは理解できなかった。本当のところ、全く不思議だった。ポールはこう言ったのだ。ねえ、わたし、ロンドン図書館でこれまでずっと本を読んできたわ。まず最初に最上階の英文学から始めた。そうポールは言った。それからこつこつ読み進めて、一番下の階の『タイムズ』までやって来た。そうして今、半分、ひよっとしたら四分の一まで進んで、大変なことが起こったの。もう読めないわ。本というのはね、あなたたちが思っているようなものとは違うのよ。ポールは叫んでいた。「本はね、全くのところ、大部分はしょうもないものなのよ。」ポールは立ち上がり、惨めさをいっそうにじませながら、言った。その激しさをわたしは忘れないと思う。

当然わたしたちはシェイクスピアも、ミルトンも、

それからシェリーだって、本を書いたじゃないのと、叫びだしていた。

ポールはわたしたちが喋るのを遮って、「そうよ、あなたたちには学があるものね。でもロンドン図書館の構成員にはなれないわよ。」ここでまたポールはわっと泣き出した。少し落ち着きを取り戻すと、ポールは本の山から一冊を取り出し、広げた。それらの本はポールがいつも持ち歩いているものだった。「窓から」とか「庭で」とかいったタイトルで、ベントンとかヘンソンといった名の男が書いたものだった。ポールは声を出して最初の数ページを読んだ。わたしたちは黙って聞いていた。「でもそれは本じゃないわ。」誰かが言った。ポールは別の本を手にとった。今度は歴史物だった。誰の著作かは忘れた。ポールが読み進めるにつれ、わたしたちの戦慄は増していった。そのなかの一語たりとも真実ではないように思えた。そしてその文体は実に嫌なものだった。

「詩よ、詩を。」我慢がならず、わたしたちは叫んだ。「詩を読んでよ。」ポールが小さい本を開け、そのなかに含まれた愚言を声に出し始めた。冗長で、センチメンタルなものだった、わたしたちを襲ったみじめな気持ちは表現のしようがない。

「それは女が書いたものに違いないわ。」ひとりが先を読むようにと促した。でも、そうではなかった。若い男が書いたものだと、ポールは言った。当時は一番有名だった詩人のひとりよ。誰が書いたか発見したときのショックがどんなものか想像してみよ。もう読まないようにと、わたしたちは声を上げて言ったが、ポールは続けて、大法官たちの生涯から抜き出して読み聞かせた。ポールが読み終わったとき、年長で一番博学なジェインが立ち上がり、第一に信じられないわと、言った。

「そんなくずみみたいなものを男が書くとしたら、母親たちはそんな男たちを世の中に生み出したりして、なぜ自分たちの青春の時間を浪費してきたのかしら。」

わたしたちは皆黙っていた。みんなが黙っていると、かわいそうなことに、ポールはすすり上げていた。「どうして、どうして、お父さんはわたしに読み書きを教

えてくれたのかしら。]

最初に正気に戻ったのはクロリンダだった。「みんなわたしたちの責任よ。わたしたちはみんな読み書きは知っている。でもポル以外はだれも労を惜しまずに本を読んだわけじゃないわ。わたしだって、若いときに子供を産むことが女の義務だってことを当然のことと思ってきたもの。母はね、十人も子供を産んだの。それでわたしは母を崇拝してたわ。祖母はね、もっと多くて、十五人よ。崇拝以上のものを感じているわ。それで正直に言うと、わたしの野心はね、二十人を産むことだったの。男って、皆同じように勤勉で、その働きは同様の利点があるのだと、わたしたちは思って、こうした時代を過ごしてきたのよ。わたしたちが子供を産んでいる間、男たちはね、本や絵を生み出していたのよ。女は世界に子孫を植え付けていったわ。男たちは世界を文明化していった。でも女も読み書きができるようになった今、その結果がどんなものなのかを女が判断するのをとどめるものはなにもないわ。つぎの子供を世の中に産み出す前に、世界がどのような姿になっているのかを見つけ出す必要があるのよ。」

それでわたしたちは疑問を口にするために社会の中へと足を踏み出したわけだ。ひとは戦艦を訪問することになった。もうひとは学者の研究室に隠れることになった。また別のひとは実業家の会合に出ることになった。みんなは本を読み、絵を鑑賞し、コンサートに出かけ、通りに目を向けていた。そして常に疑問を口にしていった。わたしたちはとても若かった。その夜、分かれる前に、人生の目標は良い人物と良い本を生み出すことだということ意見を一一致させていたと言え、どれほどわたしたちが単純だったかわかりただけだと思う。わたしたちの疑問はこうした目標はどの程度男たちによって達成されているのか、ということを見つけ出すことに向けられていた。わたしたちはきちんと答えを出すまで、ひとりの子供も産まないということをまじめに誓い合った。

それからわたしたちは出かけた。あるものは大英博物館へ、あるものは海軍へ、あるものはオックスフォード大学へ、あるいはケンブリッジ大学へ。わたしたちは王立美術院を訪れた。それからテイト美術館を訪れた。コンサート・ルームで現代音楽を聴き、王立裁判所へ赴き、新しい劇を鑑賞した。外で食事をするときは必ず、連れになんらかの質問をし、その返答をていねいに記録した。合間合間にわたしたちは顔を合わせ、観察結果を比べあった。ああ、楽しい集まりだった。ローズが「面目」についてのメモを読み上げ、エチオピアの皇太子に扮して、大英帝国の戦艦に乗り込んだ様子を説明したときほど、わたしたちが笑い転げたことはなかった〔訳注：1909年、Virginiaはイギリス海軍の船Dreadnought号をアビシニア王の訪問として、仲間数人と共に変装して訪れた〕。その悪ふざけが分かったとき、船

長はローズのもとを訪れ(そのときには側近の身なりをしていた)、面目が果たされることを要求した。「でも、どうやって。」ローズは聞いたそうだ。「どうやって、だと。」船長は吠えた。「もちろん、鞭でだ。」船長は怒りで我を忘れていたのだと分かって、それから最後の瞬間がやってきたのだと思い、ローズは前屈みになり、自分でもびっくりしたのだが、軽くおしりを六回叩いてもらったのだった。「イギリス海軍の面目は回復された。」と船長は叫んだ。それからローズは身を起こすと、船長が震える右手を差し出しているのを見た。船長の顔からは汗が噴き出していた。「行きたまえ。」わざとらしい態度で船長自身の恐い表情をまねて、ローズは大きな声で言った、「わたしの面目はまだ回復されていない」。「紳士らしく話してくれば、」船長は答えた。それからじっと考え込んだ。「もし六回叩いて、イギリス海軍の面目が回復されるのであれば、側近の面目はいくつで回復するだろう。」船長は考え込んだ。そうしてこの問題を同じ部隊の将校たちに陳述する方を選びたいと言った。ローズは横柄に構えて、待てないよと答えた。船長はローズの思慮をほめた。「ちょっと待ってくれ。」船長は突然声を上げた。「お父上は馬車をお持ちかな。」「いいえ。」ローズは答えた。「では、乗馬用の馬は。」「ロバがいました。草刈り機を引っ張ってくれたっけ。」ローズは思い出した。これを聞いて船長の顔は晴れやかになった。「母の名は、」ローズは付け加えた。「お願いだから、君、お母様の名は口にしないでくれ。」船長はかん高い声で言った。船長はポプラみたいに震え、髪の毛の付け根まで真っ赤になった。ローズに促されて、船長が先を続けるまでに少なくとも十分の時間がかかった。ようやく船長は、もしローズが自分を、自分が指定したウェストのところを4回半叩いたなら(半分というのは、船長は言った、君の曾おばあさんの叔父がトラファルガー海戦〔訳注：1805年スペイン南西沖の海戦〕で戦死したことへの報償として減じるものだ)、ローズの面目も刷新されるだろうというのがわたしの意見だと、申し渡した。そうしてこのことは為された。ふたりはレストランへ赴き、ワインを二杯飲んだ。船長は自分が払うと言ってきた。そうして永遠の友情を公言して分かれた。

それからわたしたちは、王立裁判所へ出向いたファニーの話聞いた。最初に行ったとき、ファニーは判事というのは木偶の坊か、人間に似た大きな動物、それも尊大な威厳で動き回り、ぶつぶつ口ごもり、頸をこくりこくりとやるよう訓練された動物だと結論づけた。自分の考えを試すために、ファニーは裁判の重要な瞬間にハンカチに包んだクロバエを数匹、空中に放した。でも裁判官たちが人間である兆候を示したか判断できなかった。というのもハエの羽音が深い眠りを誘って、ファニーがようやく目を覚ましたのは、囚人

たちが階下の監房へ引っ立てられて行くところだったからだ。でもファニーが持ってきた証拠で判事たちが人間であるということを想定するのは不当であるということに決した。

ヘレンは王立美術院へ赴いた。でも絵画について報告書を読むよう求められたとき、ヘレンは薄青色の本を取り出し朗読し始めた。「ああ、眼に見えない技の一筆、静かなる声の音があれば。狩人は家にいる。丘を離れて家にいる。手綱を一振りした。愛は甘く、愛ははかない。春、美しい春、一年のうちでもっとも楽しい季節の王様。ああ、イングランドにいるとは。ここかしこに春が来ている。男は働かねばならぬ。女は泣かなければならぬ。つとめを果たす路が栄光への道。」このわけの分からないおしゃべりをわたしたちは聞きたくはなかった。

「詩はもうたくさんよ。」わたしたちは声を上げた。

「イングランドの娘たちよ。」ヘレンは始めた。でもわたしたちはヘレンを引っ張って、腰を下ろさせた。すったもんだやっているうちに花瓶の水がヘレンにかかった。

「あらあ。」ヘレンは叫び、犬のように身体を震わせた。「カーペットの上でごろごろするわ。この身についたイギリス国旗の残滓をふるい落とせるか見てみましょう。そうしたらたぶん…。」そうしてヘレンはカ一杯、転がった。立ちあがって現代絵画がどのようなものなのかをヘレンは説明し始めた。するとカスタリアが質問した。

「絵の平均的な大きさはどれくらい。」カスタリアは尋ねた。「60センチ×75センチというところね。」カスタリアはヘレンが喋る間、メモを取っていた。書き終わって、わたしたちが目を合わさないようにしているときに、立ち上がり、言った。「わたしはあなたたちの求めに応じて、オックスブリッジに先週行ってきたわ。掃除婦の格好よ。その格好だったからいろいろな教授たちの部屋に入ることができたわけ。あなたたちにわたしの考えを少し聞かせようかしら。ただ…。」カスタリアは話を途中で止めた。「どうやって話せばいいかわからないのよ。妙なことなんだけど。こうした先生方はね…」カスタリアは続けた。「芝生の敷地に建っている大きな家に住んでいるの、いわば巣穴よ。しかもたった独りで。それでも生活は便利で、気楽なものよ。ボタンを押せばね、それだけで小さな明かりがともの。書類はきれいに綴じられている。本はたくさん。子供も動物もいない。ただ五、六匹の野良猫、それからアカウソ。鶏かしら。」カスタリアは突然話題を変えた。「わたしの叔母がね、ダルウィッチに住んで、サボテンを育てていたのを思い出したわ。二間続きの客間を通り抜けると、温室にたどり着くの。すると温水管の上いくつもサボテンが載っていたわ。醜くて、ずんぐりして、とげがあって。小さい苗がそれ

ぞれひとつずつポットに植えられていた。百年に一回、アロエは花を咲かせるのよ、叔母はそう言った。でも叔母はその前に亡くなった。」わたしたちはカスタリアに要点を言ってよ、と言った。「ええ、ホブキン教授が外出していたときに、教授のライフワーク、サッフォアの詩集だった、を調べたの。装丁が変だった。六七インチも厚さがあって、全部がサッフォアの作品というわけではないの、全然。大部分はサッフォアの貞節さを擁護する文章だった。それはあるドイツ人がすでに否定していることだけど。そしてこのふたりの紳士たちの論争の情熱というのはすごいものなの。ふたりの見せる学識、並外れた工夫の才能、このふたりはこの能力を使ってある技法の使い方を論じていたんだけど、それはもうまるでヘアピンくらいのもんでもわたしが肝をつぶすようなものだったわ。とくにドアが開いて、ホブキンス教授が入ってきたときにはね。とてもすてきで、穏やかな老紳士。でも貞節のなにをそのふたりが知っているというの。」

「知るわけないでしょ。」カスタリアは断固とした顔で言った。「教授は体面の固まりよ。ローズが言った船長に似ているなんてことじゃないのよ。どちらかと言えばわたしの叔母のサボテンのことを考えたわ。貞節のなにをサボテンが知っているというの。」

またわたしたちはカスタリアに論点から離れないように言った。オックスブリッジの教授たちは善人と質の良い本、つまり人生の目的ということよ、を生み出すのに役立ってきたのか。

カスタリアは叫んだ。「まあ、そんなこと、尋ねてみる気にもならなかったわ。そもそもなにかを生み出すことができるなんて思いもよらなかった。」

スーが言った。「たぶん、あなた、間違いを犯しているわ。きっとホブキン教授は婦人科医だったのよ。学者というのは人間の種類が違うからね。学者はユーモアやねつ造でいっぱいだからね。たぶんアル中だからよ。でもそれがどうしたの。楽しい話し相手、鷹揚で頭が切れて、想像に長けている。理の当然ね。だって学者は存在する人間のうちでもっとも優秀なものたちと一緒に人生を過ごしているんですもの。」

「ふん。」カスタリアが言った。「きっともう一度戻って、調べ直した方がいいわね。」

三ヶ月ほど経って、わたしが独りでいるときに、カスタリアが入ってきた。その表情のなにがわたしのところをそんなに動かしたのはわからない。でもわたしは自分を抑えきれなくなって、部屋を横切り、彼女を腕に抱きしめた。カスタリアは美しかったばかりではない。本当に上機嫌に見えた。「楽しそうね。」カスタリアが腰を下ろすと、わたしは声を上げた。

「オックスブリッジに行ってたのよ。」

「質問をしてきたの。」

「解答してきたの。」カスタリアは答えた。

「誓いは破らなかつたのね。」わたしは心配して言った。カスタリアの姿になにか引っかかるころがあった。

「ああ、誓いね。」カスタリアは何気なく言った。「赤ん坊を産むわ。あなたの言っていることがそれだったら。想像できないでしょう。」カスタリアは笑い出した。「なんて刺激的、なんて美しい、なんてこころの満たされること。」

「なにが。」わたしは尋ねた。

「かい、かい、解答することよ。」カスタリアはいくぶんうろたえて答えた。それをきっかけに今までの出来事をみんな話してくれた。でもその話の途中で、話というのはなににもましてわたしの興味を引いて、どきどきさせるものだったのだが、その途中、カスタリアはホーというのか、オーというのか、実に奇妙な叫び声を上げた。

「貞節よ、貞節。わたしの貞節はどこに行ったのかしら。助けて、オー。香水瓶は、どこ。」

部屋にはマスタードの入った薬味瓶しかなかった。かがせようとすると、カスタリアは落ち着きを取り戻した。

「三ヶ月前にそのことを考えるべきだったわね。」わたしは容赦なく言った。

「そのとおりにね。今それを考えても、たいして役に立たないわね。ところで母がわたしの名前をカスタリア(訳注：ギリシャ神話に出てくる詩泉の精の名前。アポロンに求愛されたが、泉に身を投げた。)にしたのは不運だったわ。」

「まあ、カスタリア。お母様は…」とわたしが言うと、カスタリアはマスタードの瓶に手を伸ばした。

「違うの、違うの。」カスタリアは首を振った。「あなたがね、貞節な女だったらね、わたしを見て叫び声を上げたわ。でもあなたは部屋を駆け足で横切り、わたしを抱きしめた。違うのよ、カッサンドラ。わたしたちはふたりとも貞節なんかじゃないのよ。」わたしたちはそれからいろいろな話しをした。

そのうちに部屋は一杯になり始めた。というのも観察の結果を話し合う日になっていたからだ。カスタリアには、みんながわたしと同じように感じたらしい。みんなはカスタリアにキスをして、また顔を合わせる事ができてとても嬉しいと言った。みんなが集まると、ジェインが立ち上がり、開会の時間ですと言った。そうしてこう始めた。わたしたちが疑問を出し合って五年が経ちました。結果は結論には達しないものと、決まってはいましたが…。カスタリアがこのときわたしを肘でつついて、そんなに確信はなかつたわよねとささやいた。それから立ち上がり、ジェーンが話しているのを遮り、言った。

「お話しが続く前にね、確認しておきたいの。わたしはここに在るべきかしら。というのはね、告白する

んだけど、わたしは不潔な女なの。」

みんなは驚いた顔でカスタリアを見た。

「赤ちゃんが生まれるの。」ジェーンが尋ねた。

カスタリアは頷いた。

みんなの顔に浮かんだそれぞれの表情を見るのは妙な感じだった。プーンというような音が部屋を駆け抜けた。その中からわたしの耳に聞こえてきたのは、「不純」「赤ん坊」「カスタリア」などの声だった。ジェーンはかなりショックを受けていて、決定をわたしたちにゆだねた。

「カスタリアは出て行くべきかしら。不純かしら。」

通りまで聞こえるほどの大きな吠え声が部屋を満たした。

「だめよ、だめよ、だめよ。ここにいさせなくちゃ。不純ですって。ばからしいわ。」でも、一番若い、十九だろうか、二十歳だろうか、女の子たちがまるで羞恥心に打ちのめされたように身を引いたと、わたしは思った。そうしてわたしたちは皆ジェーンの周りに集まり、いろいろなことを尋ね始めた。若い娘のひとりか、その子はずっと後ろの方にいたのだが、恥ずかしそうに近づいて、ジェーンにこう言うのを、わたしは見ていた。

「では、貞節ってなんなんでしょう。良いことなのか、悪いことなのかっていうことなんですけど。それともそれはなんでもないことなんでしょうか。」ジェーンはとても小さい声で、わたしにはなんと答えたのか聞き取れなかった。

「その答えはわたしにはショックだったわ。少なくとも十分は続いたわ。」もうひとりが言った。

ポールが言った。ロンドン図書館で四六時中、本を読んで、ポールは気むずかしくなっていた。「わたしに言わせればね、貞節っていうものはね、ただの無知よ。恥ずべき精神状態。社会に対しては不貞を認めるだけだわ。カスタリアが座長になることに、一票ね。」

これは物議をかもした。

モルが言った。「貞節だろうが、不貞だろうが、女にレッテル貼りをするのはどっちも不当というもののよ。なかにはどっちの機会もない女だって居るんだから。それに、本当のことを知りたいからということでカスタリアがいつもと同じようにふるまったんだって、キャシーが主張するなんて、わたしには信じられないの。」

「あの人はね、まだ二十一で、神々しいくらいにきれいなよ。」キャシーは大仰な身振りを添えて、言った。

「恋をしている人だけが貞節だの不貞だのを言う権利があるというのはどう。」ヘレンが言った。

「あら、まあ。忌々しいことを。」ジュディスが言った。ジュディスは科学の問題をずっと調査してきていた。「わたしは恋はしていないし、それより売春婦と

受精能力のある処女を国会法でやっかい払いにする方を説明したいと思っているのよ。」

ジュディスは自分が発明したものを地下鉄の駅やほかの公共の場所に設置することを話し始めた。それは少額を払うだけで、国家の安寧を保証し、若者には便利で、若い娘にはその負担を軽減してくれるものだ。そういう経緯で、ジュディスは、未来の大法官や、「ううん、詩人だって、画家だって、音楽家だっていいのよ」、そうした将来有望な胚芽を密封した試験管に入れて、保存しておく方法を考案していたのだ。「つまりね、こうした種は絶えることはない、それでも女は出産を望むのならないよ。」

「もちろんわたしたちは子供を産みたいと思っているわよ。」カスタリアがいらいらして答えた。ジェーンがテーブルを叩いた。

「そがこの集まりで考えたいと思っていたことなの。」ジェーンが言った。「五年間、わたしたちは人類がそのまま生き続けるのは正当なことなのか、その答えを見いだそうとしてきたわ。カスタリアはわたしたちがどういう決定をするのか見越しているわ。でもね、残りのものはまだ決定しかねている状態よ。」

ここでわたしたちはひとりずつ立ち上がり、報告を読み上げた。文明の不可思議さは、われわれの予想をずっと超えていた。そしてはじめて、人間が空を飛ぶこと、離れた距離で話し合うことができること、原子の中心も射貫くことができ、宇宙もその思索の中に封じ込めていることを初めて知ったとき、驚きがわたしたちの口からさざめいて出た。

「母の代がこうした大儀のために青春を犠牲にしただなんて、自慢だわね。」わたしたちは声を上げた。カスタリアは、耳を傾けて聞いていたが、だれよりも自慢したい気持ちがあるような顔つきだった。それからジェーンが言葉を挟んで、わたしたちにはまだ学ばねばならないことがたくさんあることを思い起こさせた。カスタリアが急いで調べてねと言った。調べてみると、イングランドには何百万の人口がいて、その一部、一部はつねに腹を空かせているか、獄中だった。労働者家族の平均人数はこうしたもので、相当の割合の女が、出産に付随する病気で亡くなっていた。工場訪問のことが読み上げられた。証券取引所、シティにあるどどかい会社、政府の役所の様子が述べられた。今はイギリス植民地のことが議題だ。インド、アフリカ、アイルランドの統治に関する文章が披露された。カスタリアの横に座っていると、そわそわしているのが分かった。

「こんな調子じゃ、なんらかの結論なんかには決してたどり着かないわよ。文明の方がわたしたちの考えなんかよりもずっと複雑そうなんだから、もともとわたしたちが始めた時の調査に絞った方がいいのではなくって。良い市民、良い本を作り出すことは人生の目

的であることは認めるわ。このところわたしたちはずっと、飛行機に、工場、それからお金のことばかりを話しているわ。男たち、それからその芸術を話さなくて。問題の核心はそこでしょう。」

そこで正餐の客たちは長い紙切れを手投票したのだ。そこには疑問に対する答えが書いてあった。このことはずっと考えた後に取り決められていたのだ。結局のところ、いい男というのは、どんな男であっても、誠実で、情熱的で、それから世間ずれしてちゃいけない。でもこうした資質を持っているかどうかというのはその男に質問、たいていは中心からははずれたような質問を試みなくちゃ分からない。ケンジントンって住むにはいいところかしら、とか。お息子さんはどちらの学校に行ってるの、とか。それから娘さんはどちら。ねえ、教えて頂戴。葉巻にはいかほどおかけになるの。ところで、ジョセフさまは准男爵なのかしら、それともただのナイト爵(訳注：准男爵baronetは最下級の世襲位階、ナイト爵knightはその下の一代限りの爵位。)なのかしら。真っ向から行くよりもこうしたつまらない質問の方がいろいろと知りたいことをたいていは得られるようだ。パンカム卿が言う。「爵位を受け入れたよ。妻がほしがってね。」同じ理由でどれほどの数の称号が渡っていったのか、わたしは忘れた。「いまみたいに、二十四時間のうち十五時間働いていればね…」一万の数の専門職の男たちはこう言い出すのだ。

「いえ、いえ、あなたがたは読めもしなければ、書くこともできない。でもどうしてそんなに一生懸命に働くの。」「ねえ、きみ。家族の数が増えていけば当然だよ。」「でもどうして家族が増えるの。」「奥方も望んだからだろう。あるいは大英帝国が望んだのかな。でもその回答よりも大事なことは答えを言わないということだ。モラルとか宗教に関する質問にはほとんどの人が答えようとしないし、飛び出してくる答えはまじめなものでもないんだ。金の価値とか、権力とかに関する質問はたいていの場合、無視されるか、あとあと面倒なことになろうと、その質問が逆に尋ねられるということになったのだ。ジルが言った。「わたしが資本主義のことをハーリー・タイトブーツ卿に尋ねたのが、羊の肉を切り分けるときでなかったら、卿はきっとわたしの喉をかき切ってたわ。何度も命からがら逃れることができたのは、男は腹が減っているときには勇気があって礼儀正しいってことなのよ。男はね、わたしたちのことをばかにして、わたしたちの意見なんて屁とも思っていないのよ。」

「もちろん、あいつらはわたしたちのことをばかにしているわ。」エレノアが言った。「それでも、このことはどう説明する、ポル。わたしは芸術家たちに質問したわ。女は芸術家だったためしはないのかしら。」

「ジェイン・オースティン、シャーロット・ブロン

テ、ジョージ・エリオット。」ポルが、裏通りのマフィン売りのように、大声を上げた。

「女なんて。」だれかが言った。「退屈なだけ。」

「サッフォー以来、第一級の女はいなかった。」エレノアが喋り始めた。週刊誌の引用だった。

「サッフォーがホブキン教授の下劣な発明だったってことは、いまではよく知られたことだわ。」ルースが口を挟んだ。

「ともかく、女がこれまで書くことが可能だった、あるいはこれから書くことが可能になるといったことを想定する理由はなんにもないわ。」エレノアが続けた。「でも、作家に囲まれるといつも、みんな自分の著作のことをわたしに喋りかけてくるのよ。巨匠の作だわ、わたしは言うの。あるいは本物のシェイクスピア。(だってなにが言わなくちゃ。)それでね、みんなはわたしのことを信じるの。」

「そんなこと、なんの証明にもならない。」ジェインが言った。そんなことはみんなやっていることだ。「ただあまり役に立ちそうにはないわね。たぶん、現代文学をつぎには調べた方が良さそうね。エリザベス、つぎはあなたの番よ。」

エリザベスは立ち上がり、ジェーンの疑問を調べるために男のなりで、書評家として雇ってもらったことを述べた。

「この五年間、じっくりと新作を読んできたわ。ウェルズ氏がいちばんの人気作家ね。それから二番目がアーノルド・ベネット氏、つぎにコンプトン・マッケンジー氏。マッケナ氏とウォルポール氏は一緒ってところね。」エリザベスは腰を下ろした。

「でも、あなた、なにも話してくれてなかったじゃない。」わたしたちは不満たらたらだった。「それとも、いま挙げた男性作家たちはジェーン・オースティンからジョージ・エリオットをまでずっと凌いでいるということなの。それで英語の物語は…。あなたが書いた書評はどこなのよ。ああ、そう。ちゃんと作家たちの手の中という訳ね。」

「ちゃんと、ちゃんとね。」ジェーンは、そわそわと身体を揺らして、言った。「それで、きっと自分たちがもらう以上に人には与えてくれるわ。」

「そんなことは分かっているわ。その作家たちはいい本を書くっていうの。」わたしたちはジェーンに詰め寄った。

天井を向いて、ジェーンは言った。「いい本ですって。憶えているでしょう。」すごい早口でジェーンはしゃべり始めた。「物語は人生を写す鏡だって。そして教育が最も重要なものだってことは否定できないわ。それから、どの下宿屋に寝泊まりするのがよいのか分からずに、夜更けのブライトンにひとりでいるのが分かったら、ひどく困ったことになるわよね。それにもし日曜日で雨が降っていたらね。それだったら、映画

に行く方が良くなって。」

「でも、それがなんの関係があるの。」わたしたちは言った。

「なんにもないわよ。なんにも。なんにも。」ジェーンは答えた。

「本当のことを教えてよ。」わたしたちは命じた。

「本当のことって。」ジェーンは話を変えた。「でもすてきじゃない。チター氏ね、愛のことや、バター塗りの熱いトーストのことを、この三十年間毎週書き続けてきて、息子たちをみなイートン校にやったのよ。」

「本当のことを言ってよ。」わたしたちは迫った。

「ああ、本当のことね。」ジェーンは口ごもった。「真実というのは文学とは関係ないわ。」そうして腰を下ろすと、あとは一言も口にするのを拒んだ。

わたしたちには要領を得ないことのように思えた。

「みなさん、結論をまとめてみましょう。」ジェーンが喋り始めていた。ブーンという音が、開いた窓からしばらく聞こえていたのだが、ジェーンの声をかき消した。

「戦争、戦争、戦争だ。宣戦布告だ。」男たちが下の道で叫んでいた。

わたしたちはぞっとしてお互いを見つめた。

「何の戦争、何の戦争よ。」わたしたちは声を上げた。そして思い出した。まあ、遅過ぎではあったが。わたしたちは衆議院に誰かを送り込もうとか全く考えたこともなかったのだ。そういうことは頭の中になかった。ポルの方を見た。ポルはロンドン図書館の歴史書の書架にまでたどり着いていたからだ。わたしたちはポルに必要なことを教えてくれるよう頼んだ。

「なぜ男たちは戦争に行くの。」

「ときにはある理由で、またあるときには別の理由で。」ポルは静かに答えた。「たとえば1760年…」窓の外の声がポルの声を飲み込んだ。「それからまた1797年、1804年。1866年にはオーストリアだった。1870年にはプロイセンとフランス間だった。一方、1900年には…」

「でもいまは1914年よ。」わたしたちはポルを遮った。

「なぜいま戦争に行こうとしているのかわたしには分からないわ。」

戦争は終わり、和平協定の署名が行われていた。以前会合を行っていた部屋にわたしはカスタリアとふたりだった。わたしたちは安閑と古い議事録のページをめぐり始めた。「五年前に考えていたことを見るのは不思議な気持ちね。」わたしは感慨深く言った。カスタリアがわたしの肩越しに書いてあることを読んだ。「よい人々、よい本を生み出すことが人生の目的であることに賛同する。」わたしたちはそれになんのことばも付け加えなかった。「いい男というのはともかく誠実で、

情熱的で、世間ずれしていないもの。」「女のことはね。」わたしは感想を言った。「あらまあ、」カスタリアが、本を押しつけて、声を上げた。「わたしたち、なんてばかだったのかしら。全部ポルの父親のせいだったのよ。故意だったのよ。あのへんてこな遺書のこと。ロンドン図書館の本を全部ポルに読ませるなんてこと。もしわたしたちが本を読むことを知らなければ、」カスタリアは苦々しく言った。「なんにも分からないままに子供を産み続けていたわ。そしてそれがきつと一番幸せな人生ってことになったのよ。戦争のことではあなたがなにを言おうとしているか分かるわ。」カスタリアはわたしのことをばを遮った。「で、殺されるのが分かって、子供を産む恐怖。でもわたしたちの母親たちはそうしてきたのよ。その母親もまた、そのまた前の母親も。そうしてみんな不満を口にできなかった。読めなかったから。わたしは、自分の娘が本を読むようにならないよう、精一杯のことをしてきたわ。」カスタリアはため息をついた。「でも、それがなんの役に立って。ほんの昨日、アンが新聞を手に入れているのを見かけたわ。娘はこう聞こうとしているの。新聞に書いてあることは本当のことかって。つぎにはロイド・ジョージがいい男なのか聞くわ。それからアーノルド・ベネット氏がいい小説家なのか。そして最後にはわたしが神を信じているかどうか。信じるものがなにもない娘にどうして育てることができの。」カスタリアは迫った。

「きつとあなたは男の知性が女よりは基本的に勝っているし、これからもずっと勝っているということをお娘さんに教えることができるわね。」わたしは言った。これを聞いて、カスタリアは顔を輝かせ、例の議事録をまためくり始めた。「そうね。男たちがたどりついた発見、数学、科学、哲学、学識を考えたらね。」それからカスタリアは声を上げて笑った。「ホブキン教授のことは決して忘れないわ。それからヘアピンのことも。」カスタリアは言った。それから読み続け、笑い続けた。楽しいんだなとわたしは思った。すると突然カスタリアは議事録を投げ出し、わめき始めた。「ねえ、カッサンドラ、なぜわたしを苦しめるの。男性の知性が優れていると女が信じているのは、男たちの大いなる思い違いってことが分からないの。」「なんですって。」わたしは声を上げた。「この国のジャーナリストでも、教師でも、政治家、飲み屋の主人でも尋ねてご覧なさい。みんな女よりずっと賢いって言うわ。」「まるでわたしがそのことを疑っているみたいじゃない。」カスタリアは軽蔑するように言った。「そういう人たちの意見がなんの役に立つって言うの。わたしたちのおかげで、この世の始まり以来、彼らが生まれ、食べ、思うこともなく暮らせるのよ。ほかのものになれなくとも、賢くなるように育ててきたのよ。みんなわたしたちがやってきたことなの。」カスタリアは叫んだ。「

わたしたちは知性を持ちたいって言ってきたわ。そしていまそれを手に入れた。そう、知性なのよ。」カスタリアは続けた。「物事の底に潜んでいるものは。自分の知性に磨きをかけるようになる前の少年ほど魅力的なものはないわ。見るだけできれいだし。なんの銜もない。芸術や文学の意味を本能的に理解できる。自分の人生を楽しんでいる。ほかのひとたちにもその人生を楽しませる。それからおとなたちがその知性を磨くように教え込むのよ。少年は法廷弁護士になるかも知れない。あるいは事務官、将校、作家、教授に。そして毎日仕事に出かける。毎年、本を一冊書き上げる。頭から生み出したもので、家族を養っていく。あきれられるわ。じきに、部屋の中に入ってくるだけで、ひとを不愉快な気分させるようになるわ。それから、出会う女、出会う女、優しくしながら、見下すのよ。そして自分の妻にさえ本当のことを喋ろうとしない。もしわたしたちが男を抱こうとすれば、見ていたいと思うよりも、眼をつぶらなくてははいけないわ。本当、いろいろな形の星形勲章、いろいろな種類の飾り勲章、それからいろいろな大きさの収入で楽しむことが男はできるわね。でも、わたしたち自身はなにを慰めにしたいの。十年も経てばラホール〔訳注：パキスタンの都市〕で週末を楽しめるようになれるかしら。日本で一番小さい昆虫はその身体の二倍の長さの名前を持っていることかしら。あら、カッサンドラ、お願いよ、男が子供を産む方法を考え出しましょうよ。それだけが見込みのあることだわ。だって、わたしたち女が無垢の仕事をお男に与えなければ、いい人たちもいい本も手にすることはないでしょ。男たちの勝手気ままな活動から生み出された成果を見ながら、死に絶えてゆくんだよ。人間誰一人生き残ることはなくて、シェイクスピアがいたことも分からなくなる。」

「遅すぎるわよ。」わたしは言った。「もういまのこともたちのためにしてやれることはなんにもないの。」「それでわたしに知性が正しいものだと信じ込ませようとするわけね。」

ふたりで話している間、通りでは男たちがかすれて疲れた声で、叫んでいた。その声を聞いているうちに、和平条約がたったいま締結されたという声が聞こえてきた。その声は小さくなっていった。雨が降っていた。そしてきつと祝いの花火だろう、はじける音が雨の音に混じって聞こえてきた。

「うちの料理人がきつと『イーブニング・ニュース』を買っていることでしょう。」カスタリアが言った。「アンが紅茶の上にその字を書き出しているわ。帰らなくては。」

「無駄よ。まったく。」わたしは言った。「いったん読み方を知ったらね、これを信じなさいって、教えられることはたったひとつなの。それは自己自身よ。」

「そお、それが可能性のあることなのね。」カスタリ

アが言った。

そうしてわたしたちは協会の資料を寄せ集めた。アンは人形と楽しそうに遊んでいたが、わたしたちはまじめな顔でアンにくじのプレゼントをして、つぎの会

長に選んだことを告げた。するとアンはそれを聞いて泣き出した。かわいい子。

※1985年版、1993年版を一部、参考にした。